

石巻市内で活動している社会福祉法人のご紹介

第13回インタビュー

社会福祉法人旭壽会

平成28年4月から改正社会福祉法により、社会福祉法人による「地域における公益的な取組（社会貢献事業）」の実施が法人の責務として位置づけられました。

この取組は、次の3つの要件をすべて満たすことが必要となります。

- (1) 社会福祉事業または公益事業を行うに当たって提供される「福祉サービス」であること
- (2) 「日常生活又は社会生活上の支援を必要とする者」に対する福祉サービスであること
- (3) 無料または低額な料金で提供されること


具体例としては ・夏祭り等、イベントの開催による住民間のつながりの再構築
・働き手が少ない商店街との連携による就労支援
・公共交通機関がない地域での移動支援や買い物送迎支援
・災害支援ネットワークによる避難所支援
・刑余者の自立支援に向けた自立準備ホームの登録

などが挙げられます。

石巻市内にはたくさんの社会福祉法人がありますので、実際にどんな社会貢献事業に取り組んでいるのか、順番にご紹介していきたいと思えます。

今回は「社会福祉法人旭壽会」さんをご紹介します。インタビューにお答えくださった方は、シニアホームかなん管理責任者の鈴木健太さん、特別養護老人ホーム雄心苑施設長の原律子さん、特別養護老人ホームおしか清心苑施設長の鈴木静江さんの3名です。

社会福祉法人旭壽会

■法人所在地	石巻市北村字幕ヶ崎一17番地2	
■電話番号	0225-73-2323	
■ウェブサイト	https://www.kyokujukai.or.jp/	
■設立年月日	平成3年10月25日	
■事業	介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）、短期入所生活介護、訪問介護 通所介護、居宅介護支援事業、地域包括支援センター、障害福祉サービス サービス付き高齢者向け住宅	
■施設・事業所	特別養護老人ホーム一心苑、特別養護老人ホーム雄心苑 特別養護老人ホームおしか清心苑、旭寿会訪問介護センター 一心苑デイサービスセンター、石巻市雄勝デイサービスセンター 清優館デイサービスセンター、旭寿会ケアサポートセンター 石巻市雄勝地域包括支援センター、石巻市牡鹿地域包括支援センター シニアホームかなん	

■社会貢献事業

(1) 災害時における緊急避難施設

法人の3つの特養ホームが石巻市と福祉避難所協定を締結しています。東日本大震災では3施設が避難場所となり、北村と牡鹿の施設では要介護の被災者を約1年間受け入れました。おしか清心苑は原子力災害時の屋内退避施設として整備され、定期的に訓練を行っています。

(2) 地域住民活動支援・福祉教育

職員の専門性を活かし、健康教室や認知症カフェ等で、講話や介護予防につながる運動等の指導を行っています。小中学校や保育所との交流を通して子どもたちへの福祉教育も担っており、特別支援学校生徒の実習の受け入れも行っていきます。

(3) きょくじゅかい食堂

旭壽会高齢者複合施設の地域交流サロンで、地域の高齢者に安価な夕食を提供することと、生活・介護等に関する相談に対応することを目的に令和4年8月から始めました。将来的には高齢者に限らない交流の場の提供、孤独・孤立に対する支援につなげたいと思っています。

—今回は高齢福祉を担う社会福祉法人として、旭壽会さんをご紹介します。旭壽会さんで行っている社会貢献事業についてお聞かせください。



左からシニアホームかなん管理責任者の鈴木健太さん、雄心苑施設長の原律子さん、清心苑施設長の鈴木静江さん

鈴木（静）：まずは、法人の3つの特別養護老人ホーム「一心苑（河南）、雄心苑（雄勝）、おしか清心苑（牡鹿）」が石巻市と福祉避難所協定を結んでいることです。おしか清心苑は、原子力災害時の屋内退避施設として整備し、定期的な訓練を実施しています。地域の人からどこがシェルターになっているのかと聞かれますが、清心苑全体がシェルターになります。緊急時は防災無線が入るので、それから受け入れと屋内退避準備をした上で、陽圧のスイッチを押します。

—原子力災害時、何名ほど受け入れることができるのですか。

鈴木（静）：施設利用者の家族や地域住民の受け入れ上限人数は150人です。内訳は、施設利用者が入所とショートステイで満床を想定し60名、職員は40名以上いますが、合計100名。家族や地

域住民を50名受け入れて150人分の備蓄は1週間分があります。内閣府からのプラス50人の根拠を求められましたが、牡鹿地区の高齢化率、入所者でも家族がいて自動車を運転できる方は避難できると思うのですが、運転ができない地域の独居高齢者を受け入れることも想定しての数字として示しております。ただし、一時的な避難であって、施設利用者は協定を結んでいる6施設への避難、牡鹿地区住民は大崎市への避難になります。

3年目になりますが、陽圧施設等の維持管理も行っております。昨年10月28日の原発訓練の時には、地域の人や社協さんの（牡鹿支所）地域福祉推進員さんも清心苑に来てもらっているので、地域の方々と一緒に進めているところです。みなさんの安心安全のためには、施設が身近に感じられるよう、いつでも施設見学などに来てくださいと伝えています。



おしか清心苑の屋内退避用備蓄倉庫

—東日本大震災により、原子力災害時に放射線から身を守ることでできる避難場所の必要性を認識させられました。当

時、旭壽会さんは避難所として機能していたと思うのですが、その時のお話も聞かせていただきたいです。

鈴木（静）：3施設とも津波による直接的な被害はなかったので、避難場所として近隣住民の受け入れを行いました。ある程度落ち着いてからも一心苑と清心苑では、震災後約1年間は要介護認定を受けた被災者を受け入れていました。



インタビューの様子

原：雄心苑では、情報が車のラジオからしか入手できず、施設利用者や職員がみんな無事であることをまったく発信できませんでした。

天井からの落下物で施設内避難も容易ではなかったです。大きな余震もあり、落下物の少ないデイサービスへ集まりました。発災後の判断はそれぞれの職員が迅速に行ったことで非常に慌てずに済んだ印象です。

自衛隊のヘリコプターの救助が来るまでの間、避難してきた地域の方々を受け入れました。施設の職員や利用者含めて100人以上で過ごすことになりましたので、利用者のことは職員に任せて、私

は避難してきた住民の対応をしていました。50名ほどの住民の中から5名の代表を選んでもらいました。これは、新潟県の中越地震での支援活動を行ってきた宮城県社会福祉協議会の北川さんが雄勝地区で行った講演の中で、住民の中でもできる力がある人には役割をもってもらうことが大事だという話を思い出したもので、その5名と私とで避難生活におけるルールを作り、名簿作成や移動した住民の管理はその5名にお任せしました。

感染症が流行しないようにマスクをつけてもらい、ラジオ体操を行って運動不足解消を図る等、地域の方にも協力してもらいながら救助が来るまでの間耐え抜きました。

そして、ヘリコプターで利用者66名を日本海側の受け入れ協力をしてくれる施設に18グループに振り分けて送ってもらったのですが、振り分けるときに鈴木（健）が工夫をしてくれましたね。

鈴木（健）：いつも食事するときの席順等を考慮して、関わりが多い方でグループを構成しましたね。慣れない環境で過ごすときに、仲の良い人が近くにいると心強いかなと思ひまして。

原：名簿の登録順に分けるといったように機械的に振り分けしてしまいがちな所でも利用者のことを考えてくれて。鈴木（健）だけでなく、職員全員が自分の家族の安否確認など、気になることは多々あるだろうに利用者のことを考え一所懸命に動いてくれていました。

そして、1年を経て雄心苑を再開することができました。職員の諦めないという精神が素晴らしかったんだなと思っています。

——本日（令和5年1月17日）は阪神淡路大震災があった日ですし、一心苑さんも平成15年7月の宮城県北部連続地震では大きな被害があったと思います。災害の話になると時間を忘れてしまいそうになるくらい伝えたいこと、伝えるべきことがあります。この経験は語り継がれていくべきものだと思います。いろいろな機関から講演依頼はありますか。

鈴木（静）：私は箱根や小田原などから依頼がありました。

原：兵庫県にも行きましたね。老人福祉施設連絡協議会は全国組織なので、そこで発表するのが支援してくださった方々への恩返しかなと思っています。また、この震災の経験が軸になって災害福祉支援チーム（DWAT：Disaster Welfare Assistance Team）（※1）ができたきっかけになっているので、私たちの施設でも職員がチーム派遣に登録し、県内や県外の災害時には派遣して支援していくことになります。

——貴重な体験談をお聞かせくださり、ありがとうございます。ここでほかの社会貢献活動についても聞かせてください。

原：デイサービスや地域包括支援センターの職員がその専門性を活かして、地域の健康教室や認知症カフェといった場で、介護予防につながる運動やレクリエーシ

ョンの指導や体験をもとに講話を行っています。小中学校や保育所との交流も行ってはいますが、新型コロナウイルスの影響で制限されてしまう活動もあります。小学校と合同で避難訓練をしようという企画もあるのですが、やはりコロナ禍で実現できてはいないです。



福祉教育の様子

——新型コロナウイルスの影響は大きいですね。今まで行ってきた事業を中止せざるを得ないといった声が多く聞かれます。その中で、新規事業の開拓や代替事業への転換を行っているといった話があれば教えていただきたいです。

鈴木（健）：新たな地域貢献活動として、「きょくじゅかい食堂」を開催しました。社会福祉協議会河南支所の地域福祉推進委員会に参加した際に、地域についての情報や各団体の方の活動についての発表を聞いていくなかで、昼食を提供する食堂（出前）や配食サービスはありますが、夕食を提供するサービスがあまりなく、不便に思っている方がいるというニーズから、地域貢献活動について事業所内の

委員会で協議し、安価で夕食の提供を行う「きょくじゅかい食堂」の立ち上げに至りました。コロナ禍ですので、高齢者のみに限定した小さな規模で様子を見ながら実施していますが、今後は対象の幅を広げていき、徐々に地域の皆様のお役に立てるような食堂として定着していくことを目指して進めています。



きょくじゅかい食堂の様子

鈴木（静）：地域の方々にとって交流の場にもなって良いなと思います。

鈴木（健）：そうですね。高齢者複合施設が開催会場で、様々な専門の職員がいるので相談窓口としての機能も発揮していれば良いなと思っています。

——コロナ禍で思ったように進展していかない部分はどうしてもあると思うのですが、地域に必要とされる素敵な事業だと思いますので、根気強く継続して行って欲しいです。旭壽会さんは石巻市の3つの地域に事業所があり、それぞれの地区特性・風土も大切にしながら事業展開されていらっしゃるの、今後も連携して事業等行っていければ幸いに存じます。

その際はどうぞよろしく願いいたします。本日は貴重なお時間、大変ありがとうございました。

お三方：ありがとうございました。



— インタビューを終えて —

旭壽会さんは、河南・雄勝・牡鹿の3つの地域に施設があり、それぞれの地域に暮らす方々の声に耳を傾け、地域の特性やニーズに応じた社会貢献活動を行っていることが今回のインタビューを通して伝わってきました。

インタビューとして書き起こしてはいませんが、後半は石巻市社会福祉協議会へ地区座談会の開催希望や、社会福祉法人連絡会や法人連携への期待もたくさん語っていただきました。

東日本大震災後に人口流出が続き、人材の確保や収益の確保等が年々厳しくなっている地域もありますが、そのような地域だからこそ社会福祉法人が率先して事業展開していくんだという熱い使命感も伝わってきました。

石巻市社会福祉協議会では各支所に地域福祉推進委員会という内部機関があり

ますが、雄勝支所、河南支所、牡鹿支所には施設関係者として、今回インタビューにお答えくださった原律子さん、鈴木健太さん、鈴木静江さんに当該委員会委員にご就任いただいています。

今後につきましても、ニーズに基づいた事業展開や法人連携などで、過疎化が進む地域を旭壽会さんと共に支援していくことができれば明るい未来が見えるのではないかと感じたインタビューになりました。

※1. 災害福祉支援チーム

(DWAT: Disaster Welfare Assistance Team)

災害時における高齢者や障害者などの要配慮者の心身機能の低下や要介護度の重度化など二次被害を防ぐため、一般避難所等で災害時要配慮者（高齢者や障がい者、子ども等）に対する福祉支援を行う民間の福祉専門職で構成するチーム。

福祉専門職としては、社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、介護支援専門員、相談支援専門員、保育士、看護師、リハビリ専門職等が挙げられる。